

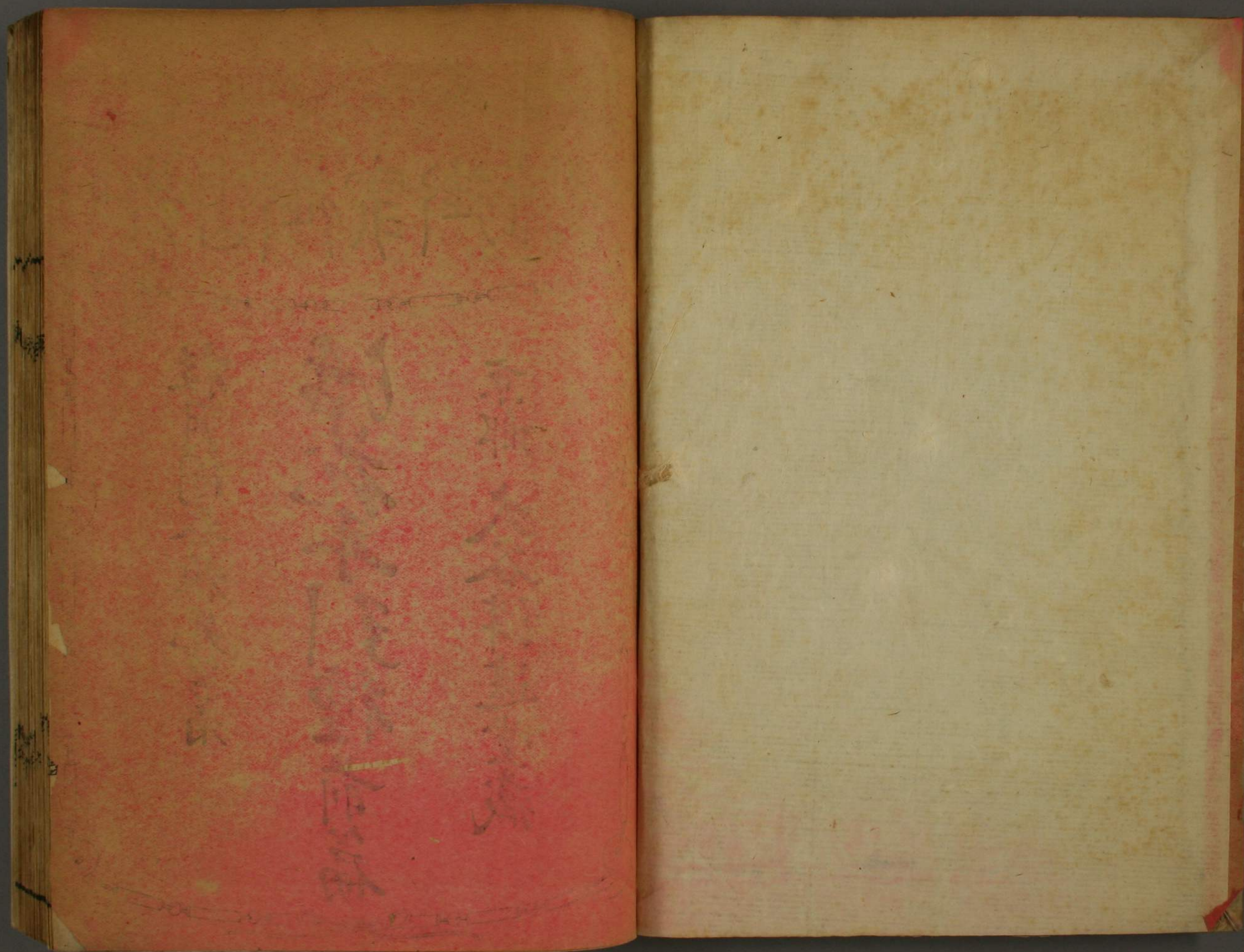


青山御流

活花手引種前篇一

ヲ多9
2848
1-10





阿ヲ多
2848
卷1-10

青山御家御流

桂月園泰雅先生著

活花手引種前篇

京都 大谷津速堂藏

自序

蓋聞天者缺酉子地者不滿卯午方圓險夷
共屬乾坤萬物為其氣被覆載而自象乎
其形是以為插花之體也高低斜正則南北
之極長短屈伸準陰陽之度量以為左右前
後輕重繁瘦之繩墨而紉本末早晚之等上
翫于公宴加乎佳節慶賀之式下備于賓客
之禮夫非情之於有情也守真保壽與於菓

序壹

實花葉形狀將資浩然之氣養神慰意乃是花木
不言之妙榮枯盛衰移於四序之變化濃淡疎密
隨于山川風土坦然莫與物爭焉雖告諸人人獲
之未必樂焉耳目徒惛昧于名聞而心身亦奔走
于利途嗚呼人者三才之一而非靈物之長哉頓覺
此意則茅檐數椽坐均于僊界無誓言而緣于神
明佛陀弗學而遊君子之藩籬矣原夫故

正二位大納言藤原基衡卿 公務之暇尤留意於

此伎濫觴于青山流溢于海外嘗羽翼於規準
本諸三教配諸五典其條律全具矣譬言授于人
得一枝則求性而示順逆之理作一瓶則繫乎邪
正得失來由以述善否之故擬禮讓教諭敬和之
道焉余汲其末流奉首肯初設會筵於東都弘
其風於丘里爾來同好數百學習積久略達其
義者居多焉遂承 園公命不擇貴賤士婦
集所插之花狀一百瓶而號活花圖大成往年

上梓布乎世雖然或其花樣繁茂則意味不淺
而畏初學難辨明於是同社某專欲誘掖容
易頻來從使故再蒙 今園公旨撰其出據
隨大小講增減應屈伸分表裏加之就幼學
所插之體直以摸倣焉省有餘補不足所換入之
始末併圖之銀棗備便焉苟將掬 青之滴
輩勿論都鄙遠近東家務餘力依此集圖學
之則林野之景色河洲之意態迎模於一卉一枝

貯于瓶裏粧于席上觸香對艷則雖暫時手技
其娛豈盡乎斯哉

東都桂月園吉尾 泰雅謹撰

寬政十二庚申年

孟春穀旦



活花多引種凡例目録

卷の一

○ 各種園條圖繪部分の事

○ 傳説大要園条の事

○ 花配仕指並瓶中若愚の事

○ 五種花梅同様方並花形の事

卷の二

○ 習古花形並並倭傳賣名等の事

卷の三



○ 即興花指並花配為の事

○ 各種附書院の畧體繪付花形圖の事

卷の四

○ 同社花形競務園繪の事

卷の五

○ 慈傳園條若花増目録の事

○ 四季花園指並遠近取巻多當の事

○ 花道大意播扱問答並生活挿字義通條の事

目録 畢

三枝四所花出の事

○凡花取の一作上三の生と主裁相の三枝と居下三隅の位と
主中央と寄位と有して大小曲曲と位は神密長短と名
三枝は邪一五枝は備七所は三つけて出せの自持子別神用
變化と有す之類は奥の圖に依り弁明す

花の仕養の中一管座の比へる事

○花造代妙有るも不吉なりて新津の備る能令信
導き其心とひくくわん罪ひく思ひ邪なるに別美玉女の時
天必是子祥と與へる小室と云神佛子捧けて仕養の事一

賓者小をめて管座の最初より管座の上より座の端より
るせは流る枝葉の塵砂と拂ひ或は中の葉枝の末枯葉花
水と取捨水は流る露ととせ器花流浄き有る一或は
席上より管一籠と取らば花取る花持同意也
種義と云して花入置き事

○花の神佛子備一寄位美人子とむる座の端より花持義と
可入置き事有り或は獨樂花情の意と有はしては花の
持子三枝の持儀あり華は流つて乳房と金むる殿院の
くく鬼神ハ事と置き置る花と取らば玉と取置未きは花

そのいづれかとして必被義と漫々として

花形正風神を考へて

○花の正風を考へては玉子花巧なる体と好む或は花柄正
花の又自己の素態を惜みて花柄人の花は花柄を加へ或は
花一赤蓋物おの考果は物名聞はほり或は我々分限を越
是事と考へては皆花神の要と云ふ所なりは左の枕身傍の甚
しき方て是木の趣ハ切之り切之り切之り切之り切之り切之り

誓古より前後の以事あり

○花と云ふの次有ハ先般花の名は物と云ふは花中より細る

工夫第一其花の生長性より考へて玉子の樹之は花中
能居る時ハ其風情成易く出生に自りたるは花中より
何種出生と考へても花中疎疎なる有るは又花葉を
持てハ一且生性と考へる花は花柄長く花葉を
たり誓古の如く強く出生の是と云ふと花葉花と考へ
きと除く事と考へる時ハ其花柄を考へて花葉を考へ
考へるは是と云ふ花と考へて花の傳をり

二種花合物の事

○二種三種花合するハ大抵木と花と花合と云ふり或は花と草

木子木と海ともよりむ高き依り強き弱き深きと浅き未きた由
もあたら名変りも物と石合一但山木子多叶実子実の形花
葉よにみれも物と変り多し比者鼻の図と考て

花形海源の事

○花形基志けうむよりハ満地より一枝葉満くむよりハ
わけり下子竹情も花も葉もよりハやう形やうゆり一死
風情も悲して花のみよりやう手よりハ三より一ハ老
木の中葉隠れよりゆりハ岩折り一物あり

花形草三作九葉の事

○まハ正しく直方ハゆめとまけハ斜ハ横なつ作とも草ハ鹿らと
まけ拍ともふ右三作をわけて九作ともある所消竹あけ後つ竹
中より葉マク葉マケ和情をひき前より後より等あり
但花形ハ直方ハ花三長より過るべ以下依り相い出せお似似
花形直方ハ花三長より過るべ以下依り相い出せお似似

花形直方ハ花三長より過るべ以下依り相い出せお似似

○吾那ハ直方ハ花三長より過るべ以下依り相い出せお似似
こも不出而のふりさる果用四ハ以或馬を柳吉盛の形ハけ
肉着又飲食の具ハ柳吉盛より考て葉茎木根も毒
梅ハ腐りおれ毒竹やうはして揚子相茎と口ハ入る次

朽枝破葉相用ゆゑに場有り事

○朽枝破葉葉葉花の模振とそれの時節に似合ふ事
稻葉等ふ亦用ゑ場あり但西落後朽葉と正而木に似て又甲の
意何と花葉枝とも奇麗なるかきり

形状花葉文質有る事

○花葉文質といはれは花の葉の如くして人顔の如く葉の文にして花
眼の如く花葉各互不及雪時花状の如く花の如く花葉
より葉の時ハ葉より葉花より葉の時花より花葉の
候なる時ハ山本野州より果し拍探奇巧に過るは花の如く

浦練花なり是等の境と能く一相有

手つゝる物不朽不枝葉の事

○筆の筆舟の如く又鉛筆の如く朽枝葉木ありは浦小く付くは
知れぬさへ似ててつゝとさきりまをつゝ如き或はやり遠く朽
傷てしゆゑ朽は筆や似てありしやんは有りる後々の巻けし
の圖と互考せし

親儀向等の並語の事

○親儀向の如く浦人オ括括杯の昔ハ先大凡ハ鶴登後れ候時
たしゝる物と付しゝるは葉の如く又名悪く色香互かきり物或ハ

花睡業破き折きやのみ葉朽枝末も亦依て去りて中
易きお花八用一は古祝儀の等小枝くも傳多し

掛物に對する花形の事

○掛物に對する花の繪の貴美と主として花は是に唯ふを
依て畫の考案とも前ハ勿論統々挿絵亦ふも其趣前ハ取はさく
登りてとり花末をいふは花の形をいふは花の葉末をいふは
白地は花の形をいふは花の葉末をいふは花の葉末をいふは

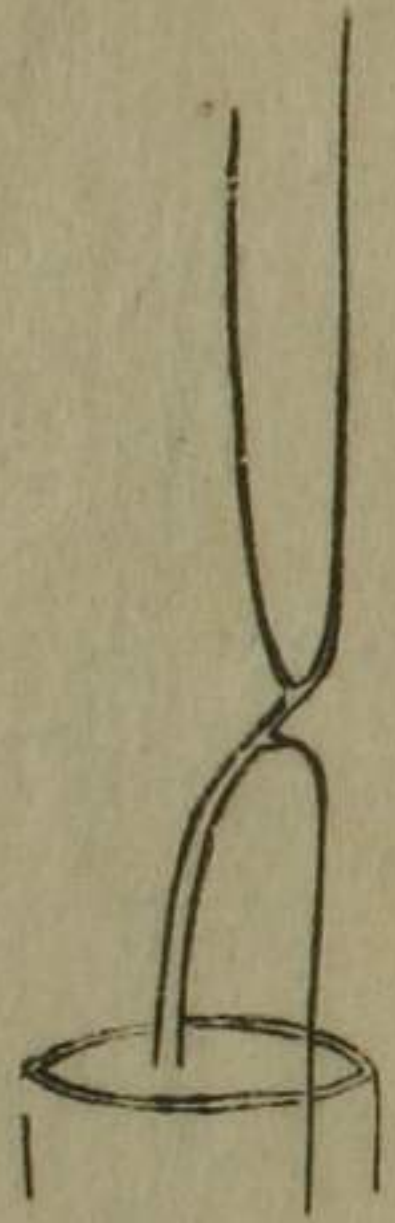
書院生鋪向と茶室の花の及不同の事

○書院生鋪向の花は別處の儀なるを花澤に畫かると其趣は

番物も亦是に唯以茶室ハ唯畫挿雅趣と主として其趣は
是も亦花も是に應する物也

花見する人の事

○春に候きたる花は世上の吾界小物と云腰の物肩末我ら若しは
多し所ふは花より二疊程隔帯して之又一に此評するは花の
下はもつて源但集會亭挿花の事也又其評するは花の
若十六箇條ハ傳書の内僅に十二と抜きて其三條と云は尚
清流の真と探ふ事と云は都鄙遠近其評して清流
傳書の人にも候あは夫ははよりて學いよ



あつ月の梅
あつ月の梅

折花茶のしるしを成株之
しるしを成株之
しるしを成株之

あつ前屋のちくちく
あつ前屋のちくちく
あつ前屋のちくちく



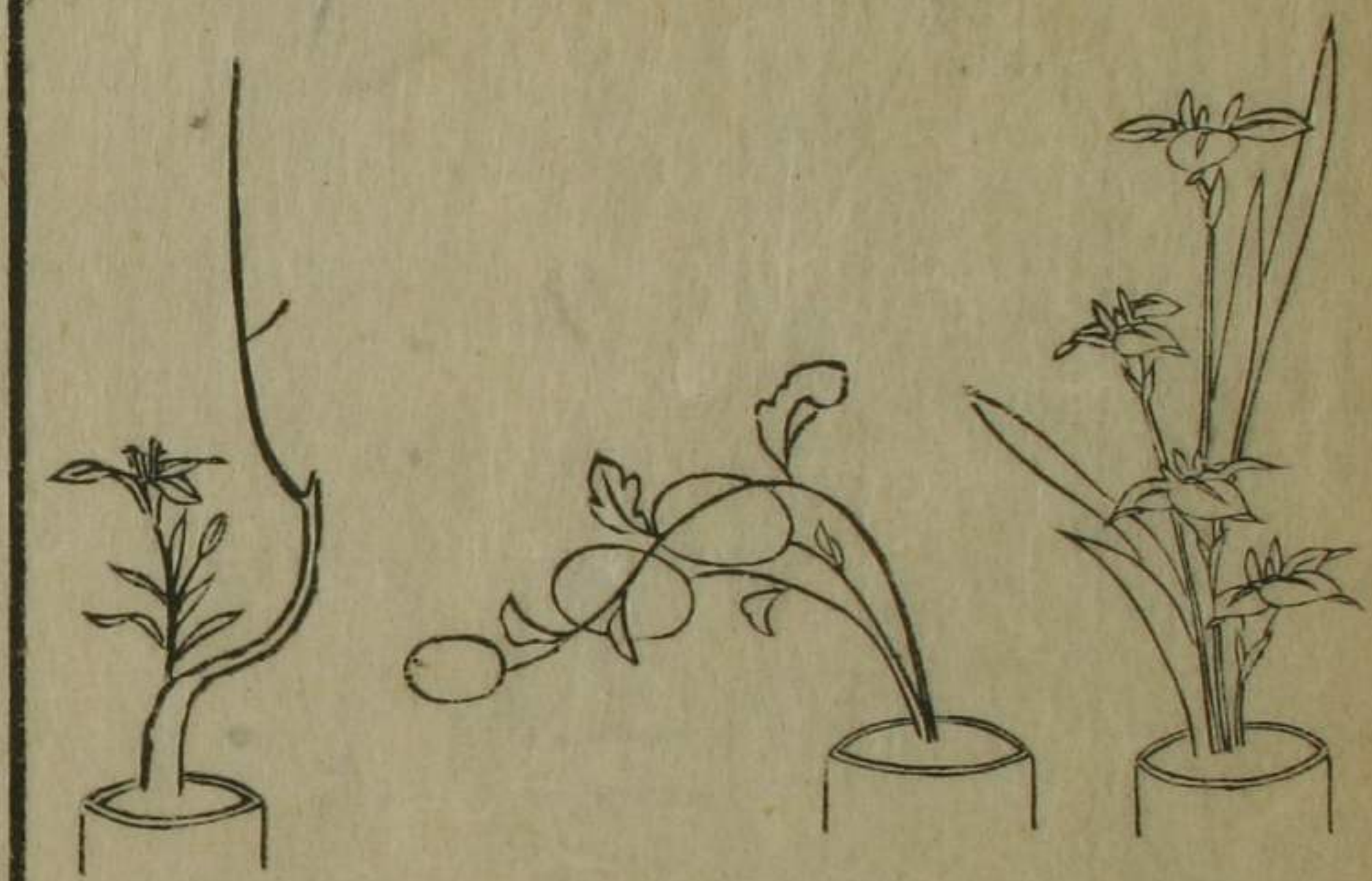
あつ鏡のさくさく花葉枝
あつ鏡のさくさく花葉枝
あつ鏡のさくさく花葉枝

あつ見きり十字字置ハ
あつ見きり十字字置ハ
あつ見きり十字字置ハ

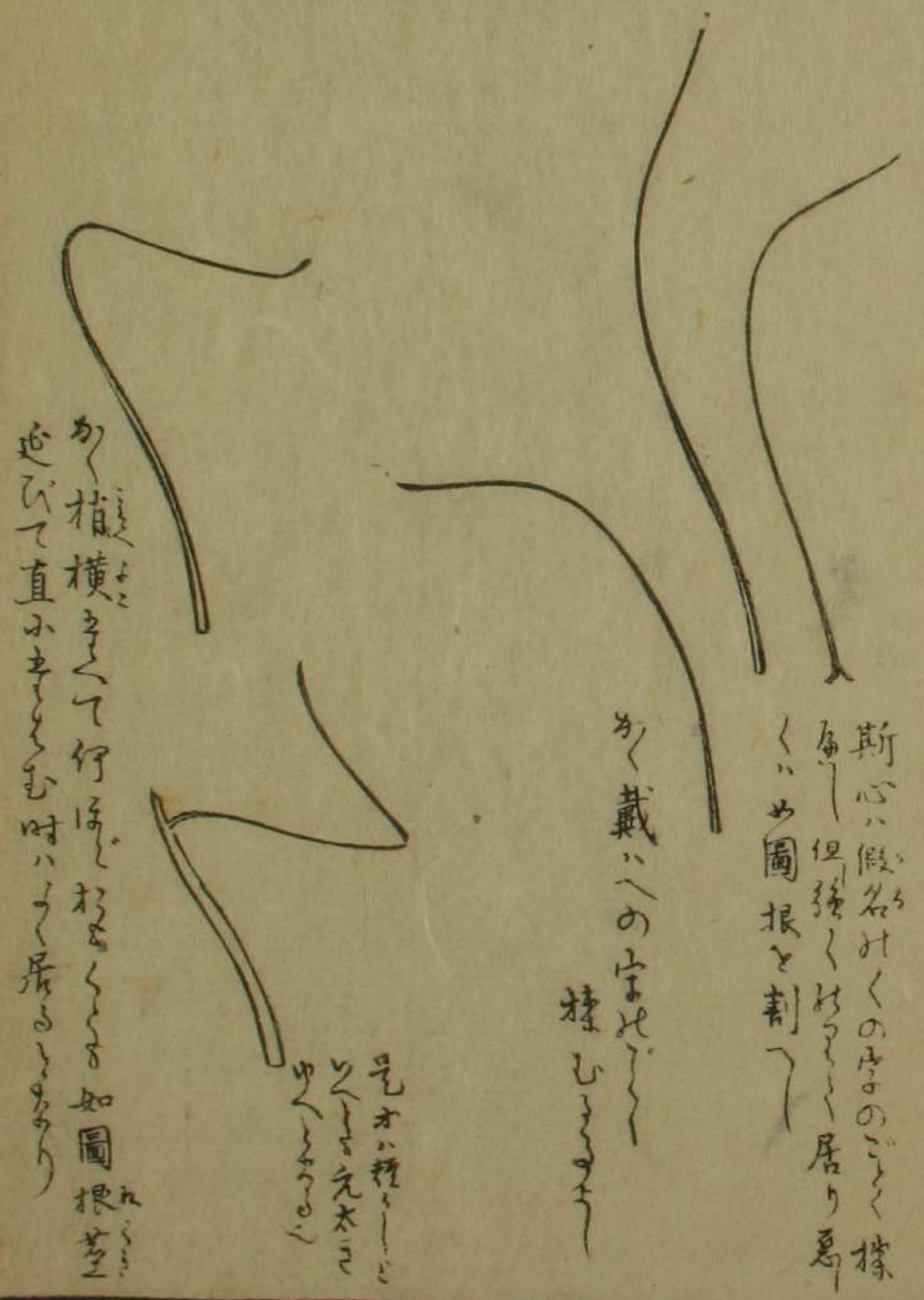


右小杉根

あきくさくさ竹列鷹行
 持杯のこころをさす
 但前浮上下の深洗あれは
 苦くは
 か、草して木と畏之又
 本より子をつつあゆみ
 多、但一方通用物ハ
 苦くは



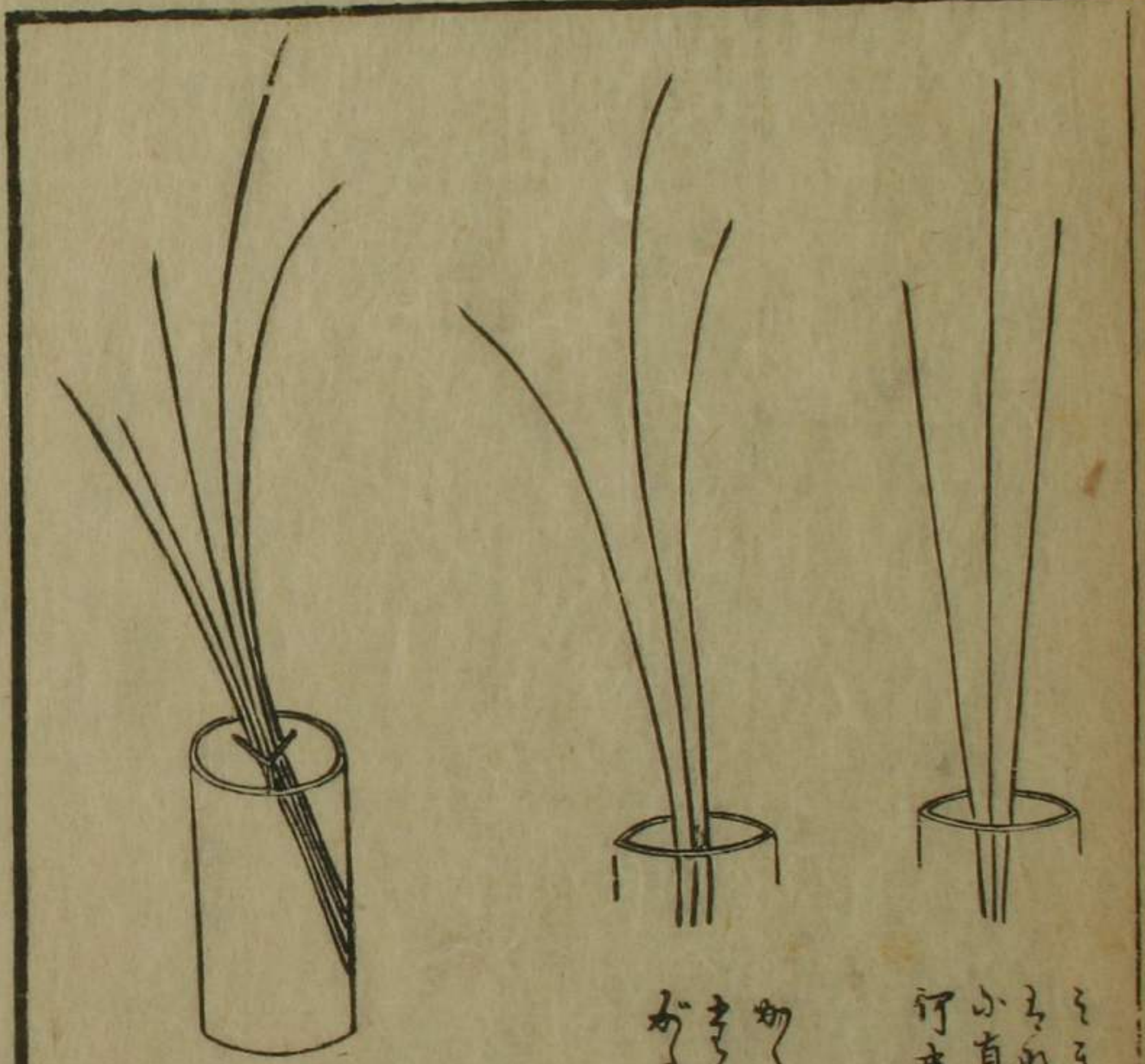
あきくさくさ竹列鷹行
 持杯のこころをさす
 但前浮上下の深洗あれは
 苦くは
 か、草して木と畏之又
 本より子をつつあゆみ
 多、但一方通用物ハ
 苦くは



か、植横きして行候、おさくさ、如圖根を
 近びて直ふまゝにむ時、はう、居るゝなり

是オ、種、
 ン、
 ヲ、

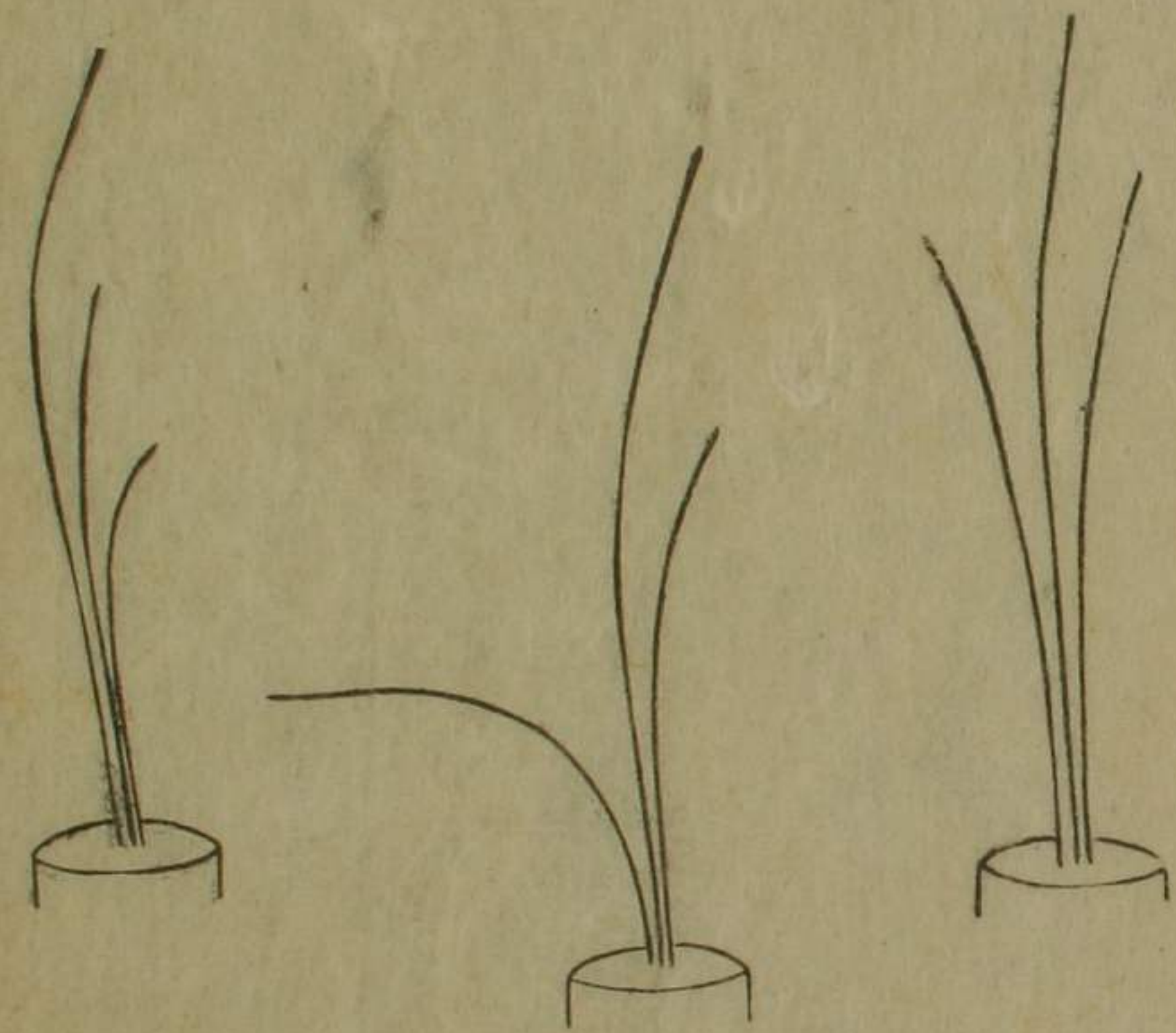
斯心、假名、けく、の、字、の、
 居、
 く、
 戴、
 株、



か、の、
 株、
 大、
 め、

か、
 本、
 株、

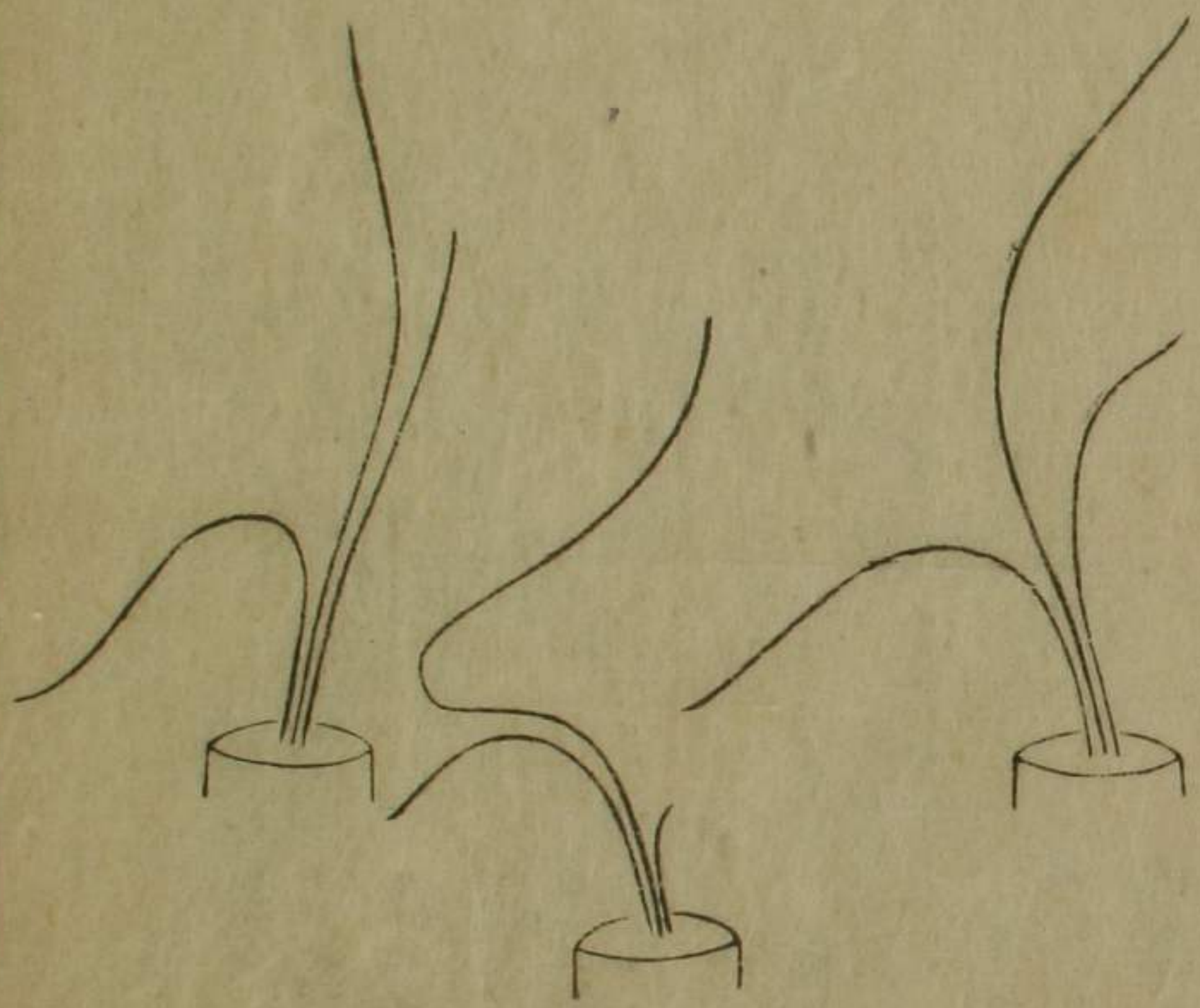
さ、
 直、
 行、



草木各出生の大小
味密小随ひ上より七
枝内の何れかの三枝
小葉とも相違き
并に配ひ一高下左
右逆横表裏自然
小何七変化時宜し
兼し見斗ふ
なり深し
此意とん取扱へ
るなり



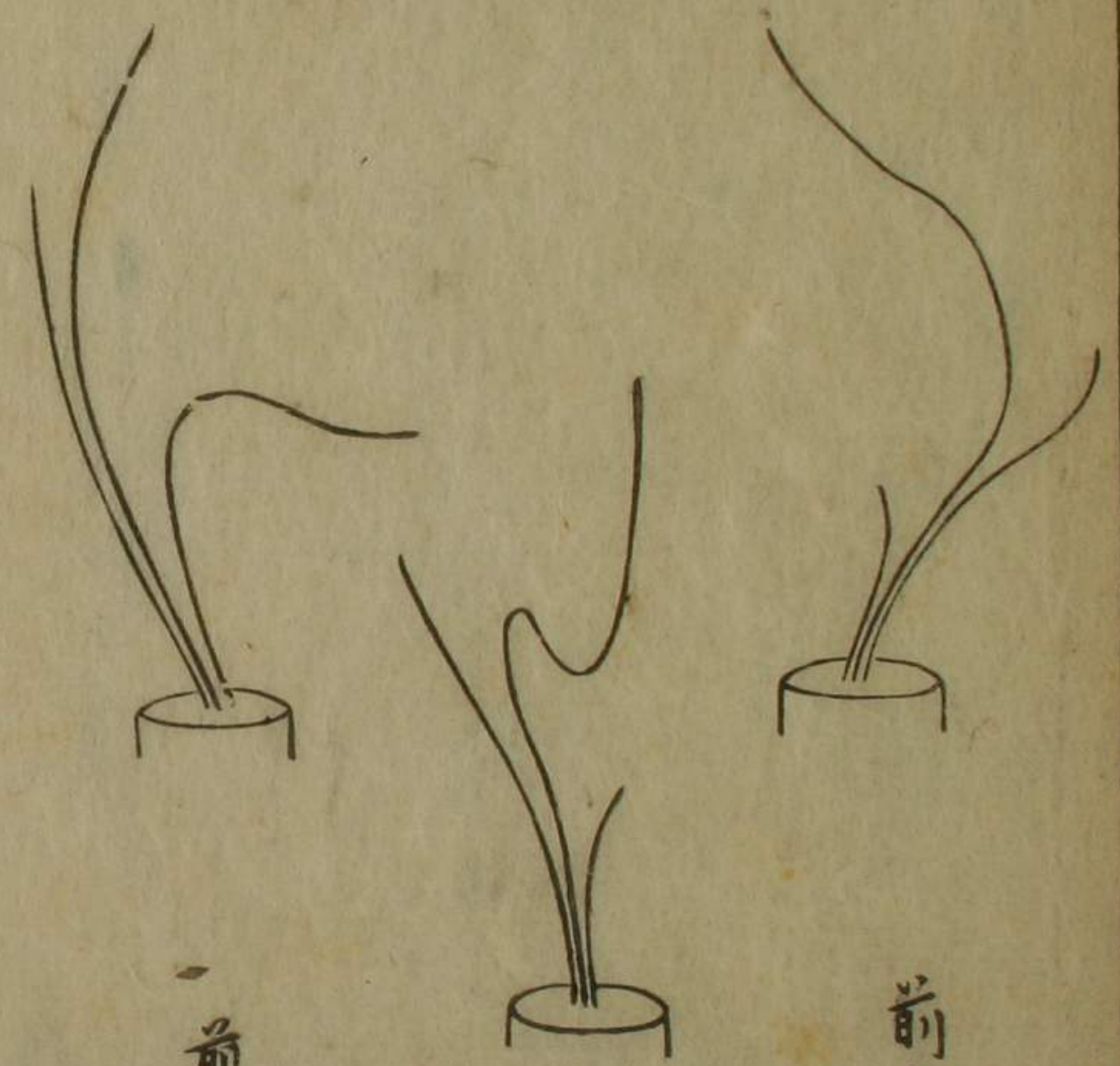
圖の所の七枝は花葉枝の多少長短小随ひ味密屈伸に應
三枝小配り五枝小多ら或ハ七所小備小尚出生を摸
擬て魚帶増減ふん得傳ふり



前同

前同

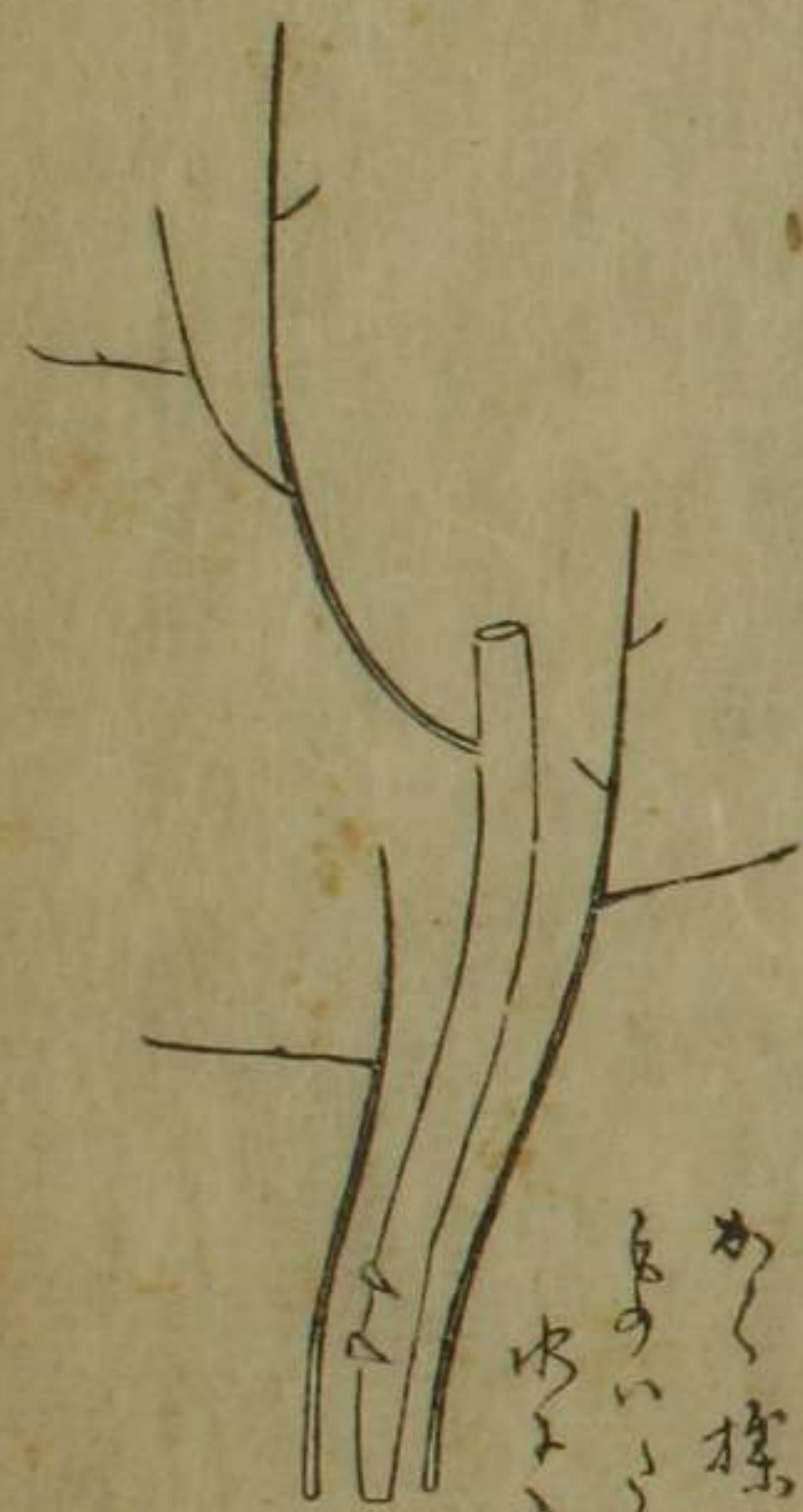
前同



前同

前同

前同



かく揉みたりし水もふと
 良しといふくくくくくくく
 水入る所を録す枝の
 入る所とてさむ
 水よこへてさむ



如斯大小の根ありといふも
 根送なき水の中とありうの
 以左の通り



如斯腰水中ともふく
 根ふ様子揉て入る
 水際よりいへてさむ



草木何より根
 如斯右に左に
 多し時ハ水中
 水際添ひて花
 散居り次尚次とて

右五種の花枝の標方六枚挿葉牡丹の五子之とハ世々多く
 然も盛り久ま四時お後して他くは依り活きの取上りぬ又方ふ小
 くり地ふさふさしりぬれぬ流ハ此五種の挿葉を考して余は此五種
 カとぬ挿葉之を標方左の如

喜枝



かくみのみく挿

○ハ挿葉のそり
 △ハ葉の縁のそり

新のごく挿心

喜枝



新のくは通挿

新挿したの小目

喜枝



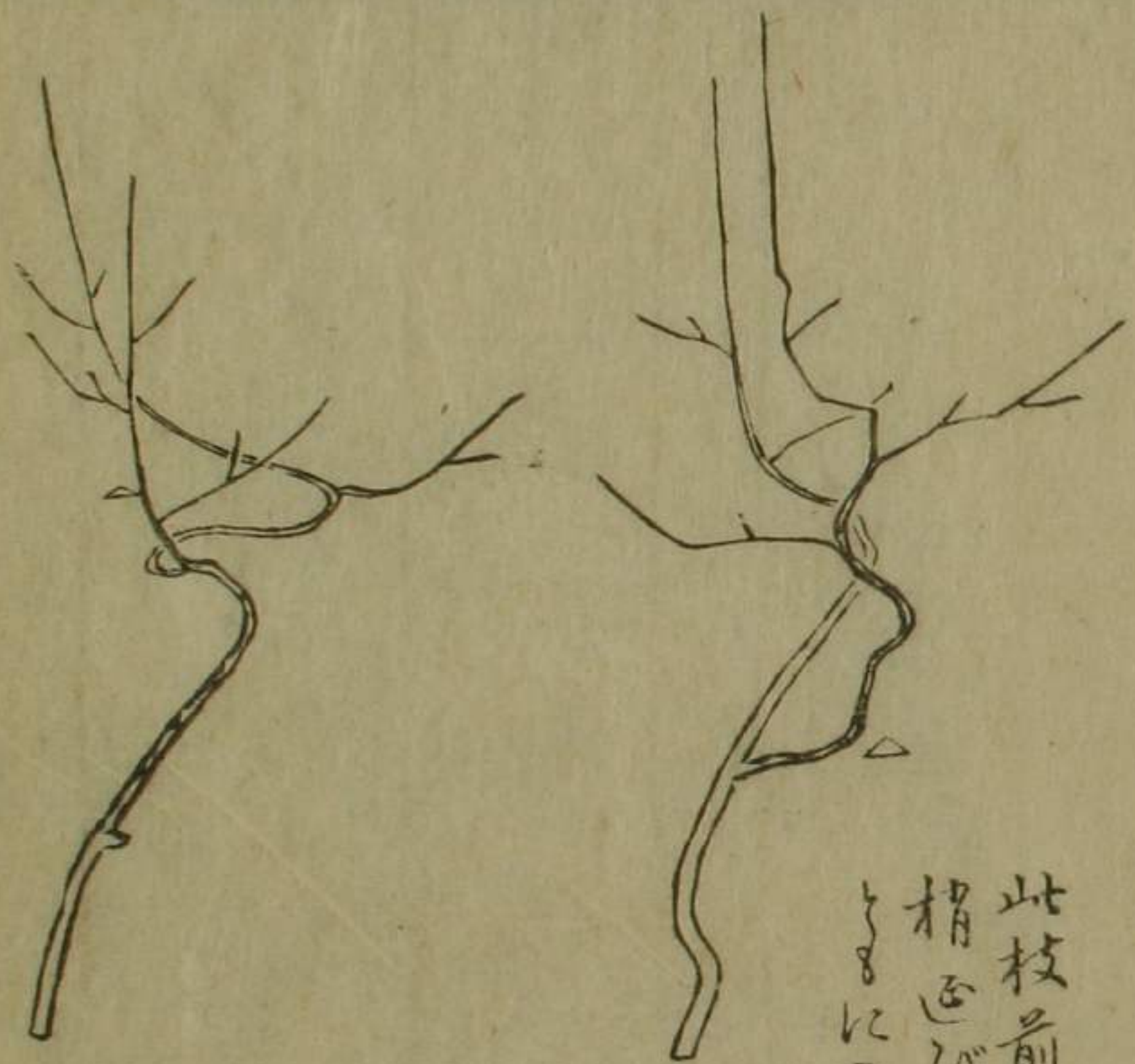
か上下挿

右三枝合

次出す

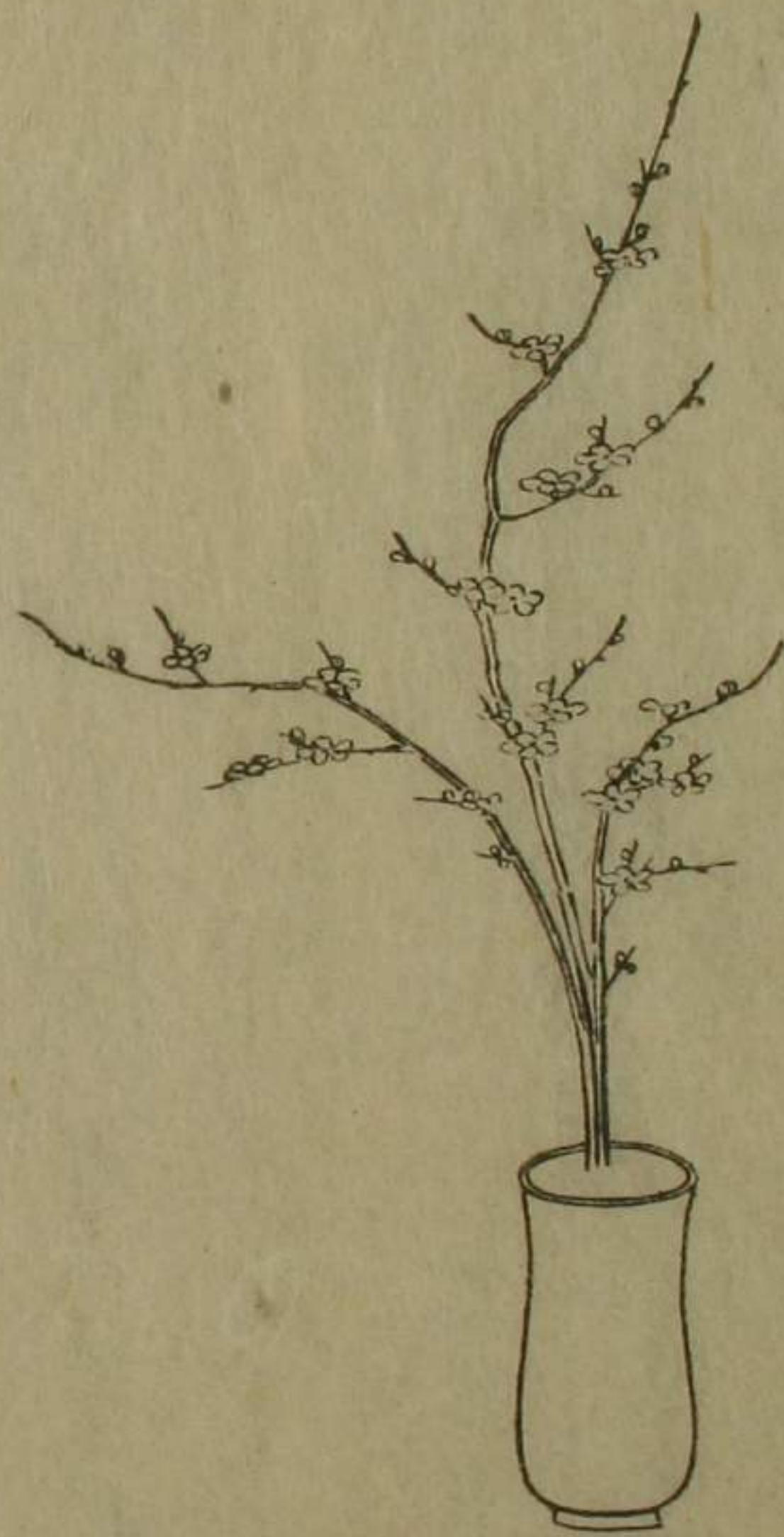


新挿正し相



此枝前の方曲より面白く
相違びてく、腰りれば、
よりに急、前を除て向て目

此枝活の方類り子屈
曲たれとも腰伸て直
形も、前前の枝を除て
ちる、外何ふ、
此意を推す

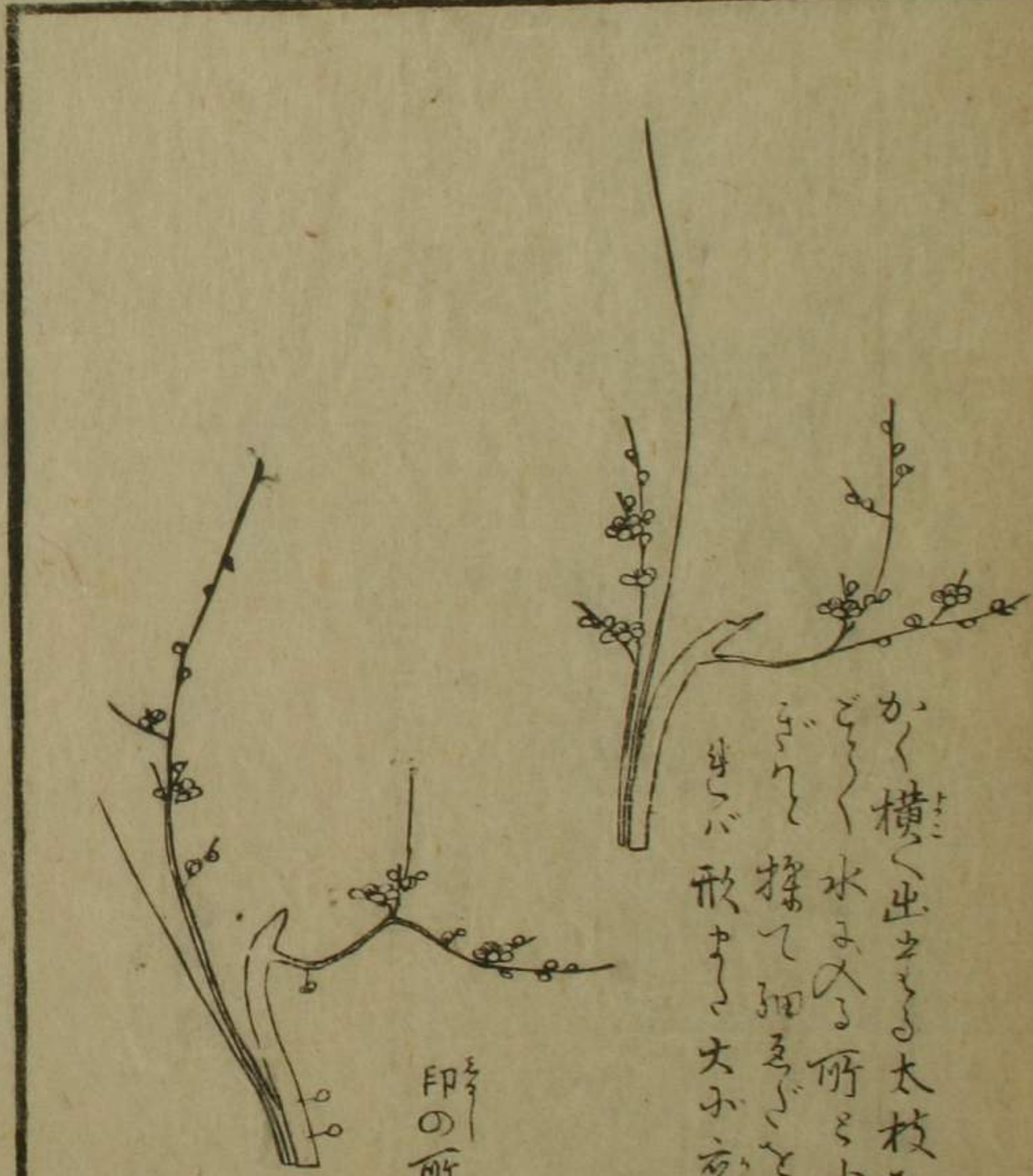


右三枝と云、荒壇如形、
入るなり、それ外自然、
常、整ふ、値い、変化、
け、趣、梅のみふ、あ、
き、物、を、の、回、ま、り



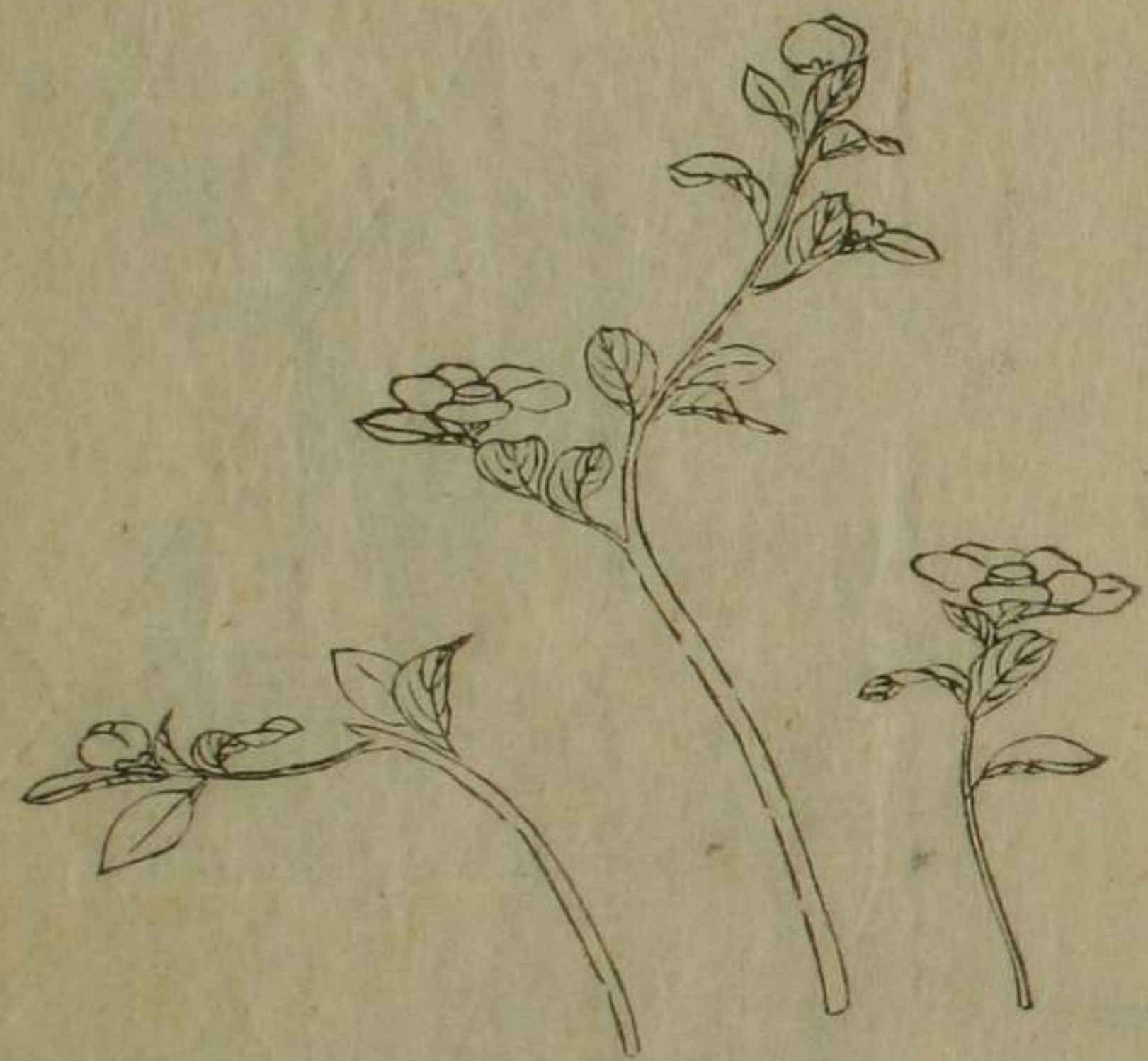
如此の節もさへなへつ、
置かゆれハ左のこゝへ
変りたり

印ハ様々
所ニ余ハ
准



印の所と様々

かく横へ出さるる太枝と左の
こゝへ水み入る所と小枝の出
かゝりて揉み細まじとさかゆ
しハ形さるる大小変りたり



如此所々葉繁く物
 々々々々々々々々々々々々
 之乎枝屈曲し
 水際挿ひかき
 物たまりとあく初心
 之三奔々々々々限
 とさささささ五本ハ
 得々々々々々々々々



椿ハあつ風情た
 薄くさゆさゆ
 倏々椿ハ木ふ
 形ハもさゆ
 何れ椿小
 相おさる
 各同意あり
 次乃枝方の
 別種
 卷小身



如此枝さうし花葉のはなは繁はく
 去き患うれく取捨とり花と一い二
 輪りん小強せう々葉を五ご枝も殘
 一左の通とめんをいい入いるは
 茎と柄へらの葉と厭いと
 時とき風情ふうじやう悪わるく根も
 印いん所しよ所しより
 前まへ在ある



如斯さうし椿つばきハ多おほ分ぶん三枝の
 内うち二枝ハ産うまて魚い帯おび
 させく其外ハ小枝と
 ありらひ小添せ事
 別べつ体たい眞ま乃
 卷ま小多おほ



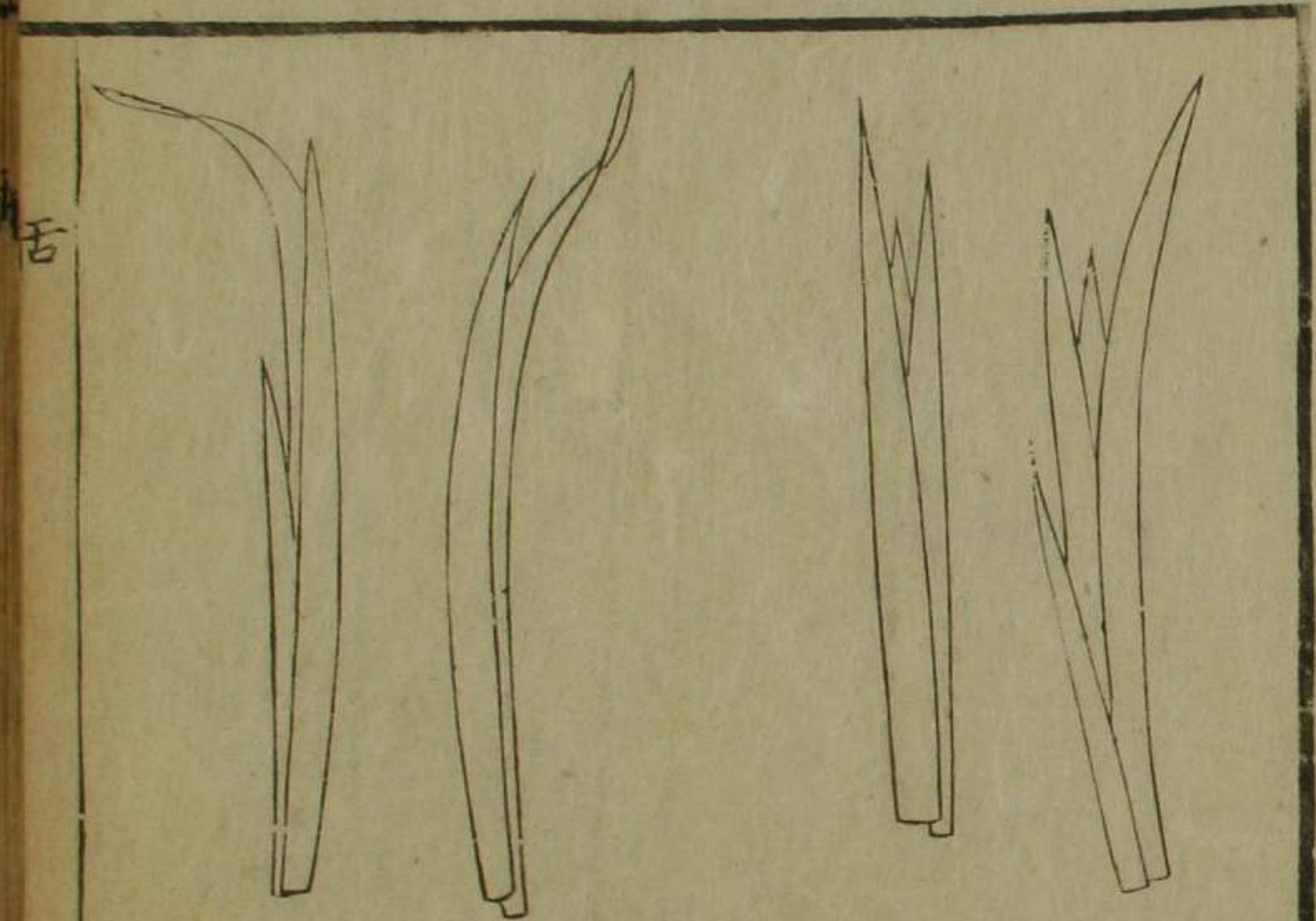
如是元より真直
つるまきさの葉直

牡丹の風情ハまゝ葉のうろたひり圖のこゝに乃葉ハ繪取てハ
曲りて面白げなる花小取合時を葉先をさしふたれ
忌一左の如く形をさき葉の直なる小まゝに次尚葉の
描方次小まゝに見よ



如此ハ懸瓶^{かけ}舟二
重杯^{かさ}専り又
置瓶乃ち世杯也

如此ハ二瓶
は小内外の
添方
解ハ是ハ准
屋

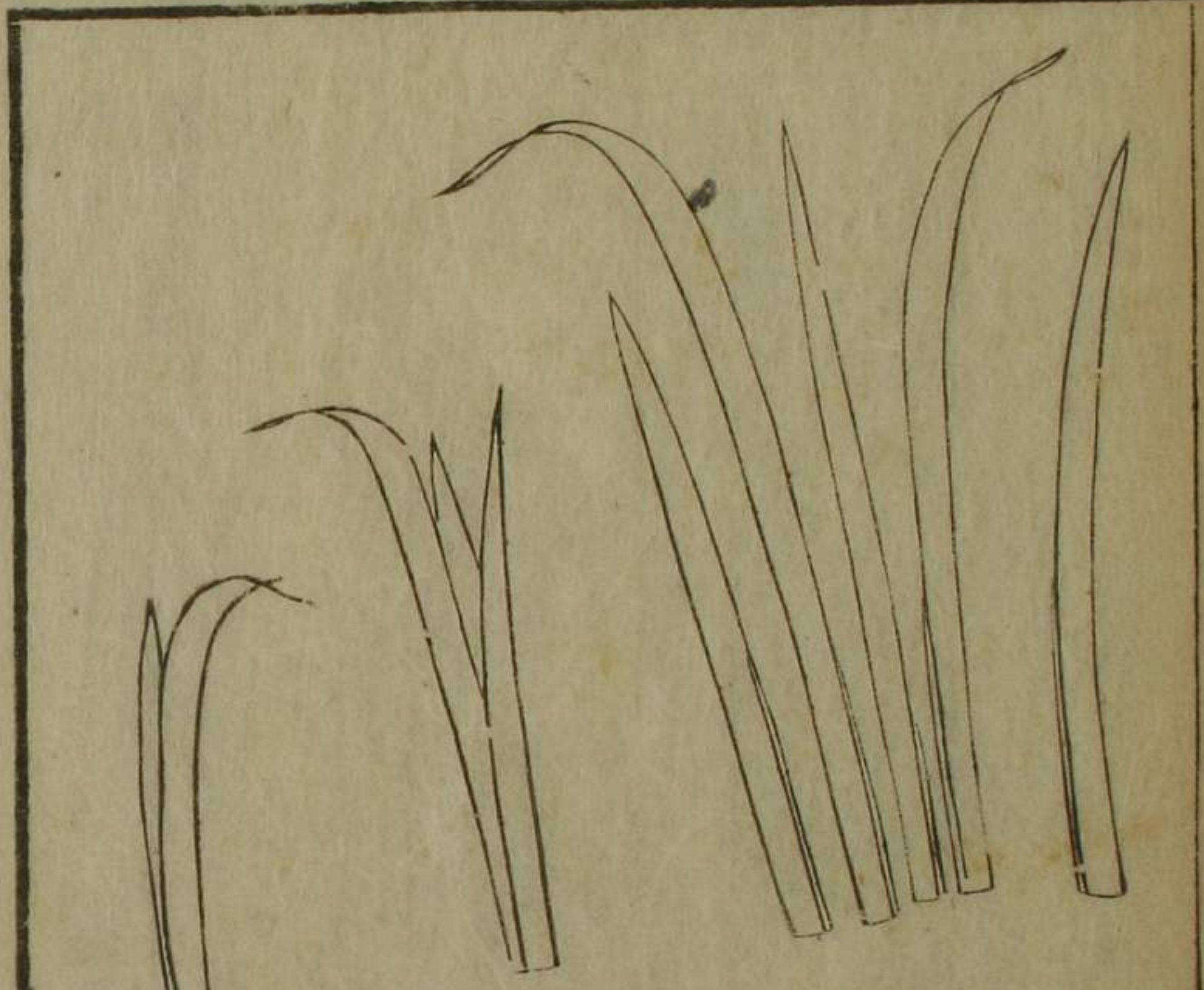


あむり葉
くみ方



如是の葉ハ懸瓶
添瓶よ

斯三枚も四枚も但ちり
多分中々ひきくも場所
相應ふ見合る左乃長き
葉ハ心の冠葉け但ちり



何き産の傳ふて遣
中々もよゆりもよゆり
ハよくなりおふ圖の如
く枝宛もよゆり
左付通長短恰好能
様子二枚も三枚も
もろみよきとよせ元
乃よく組合ふ最初
ハ枝一がけよよゆり
ハ易出するよゆり
真多



三本遣前小
同

二本の挿挿変化
数多あり活巻と
見とく

右の但葉小直形
茎と交つて如是
中遣る



あままで順々曲
りまゝの葉添ひ
湯しおろしおろし
容も出来もはら
尚遣方奥小く
何き杜若の葉も
直まゝのいゝはら

花も曲有る面白極なり
斯本末す小忌くは移り
てい必水中水上す小細儀
なり怒て杜若の葉急
通り小なきあつてさる
物なり譬本直してす
左の如く末のいゝほかに
曲りくハ葉小添るゝ

如此の花を懸瓶漆(物水陳)
 磨豆杯小用ひくすく杯一
 一 浮巻と見立



右以同
 別体奥小



曲花遣方
 別体後巻小
 数瓶あり

三本遣左勝
 手別体浮巻
 多一



斯花長終子枝乃
 出る時ハ何輪つとて
 各用たのちあり
 活花小志も人菊
 とつゝ脚の意
 体用いそむ
 きさむたなり

花

世



如此の元ハ直形れ
 枝葉工用する外の枝
 ともを

大菊ハ作り方乃功者不功者少なり
 唯活花小志ハ直形れと專要と
 くの曲り或ニ物三つ
 但中菊小菊とも
 乃侍たるも
 魔ま籠かごと澤山掛
 籠かご扱あつかふと
 風情ふうせいあり
 活卷かまきりと

花

世



右小同



右のこゝろを以て
枝は三つ五つ
七輪のち時宜し
て入多し茎は
奥の巻あり



かく茎の曲りまは
右圖乃ごとく
直して用ゆて
このうちハ
どれ捨まは
枯るや
ま
この尤節と
捨るなり
但是と標
紋の口傳
折る



かゝ瓶瓶おし十をちひけて
 入まゝもまゝかゝ一高
 籐柄のこれ咲か別て田
 小菊物も同意あり

作らざる中菊柄
 か澤山小入まゝ
 大形果り押合て
 かん



右一輪つゝまゝを二輪つゝと
 交へく如きまゝ尚別体
 活巻小多しこゝハ唯大通の
 一方とこゝ



秋の小菊乃大凡



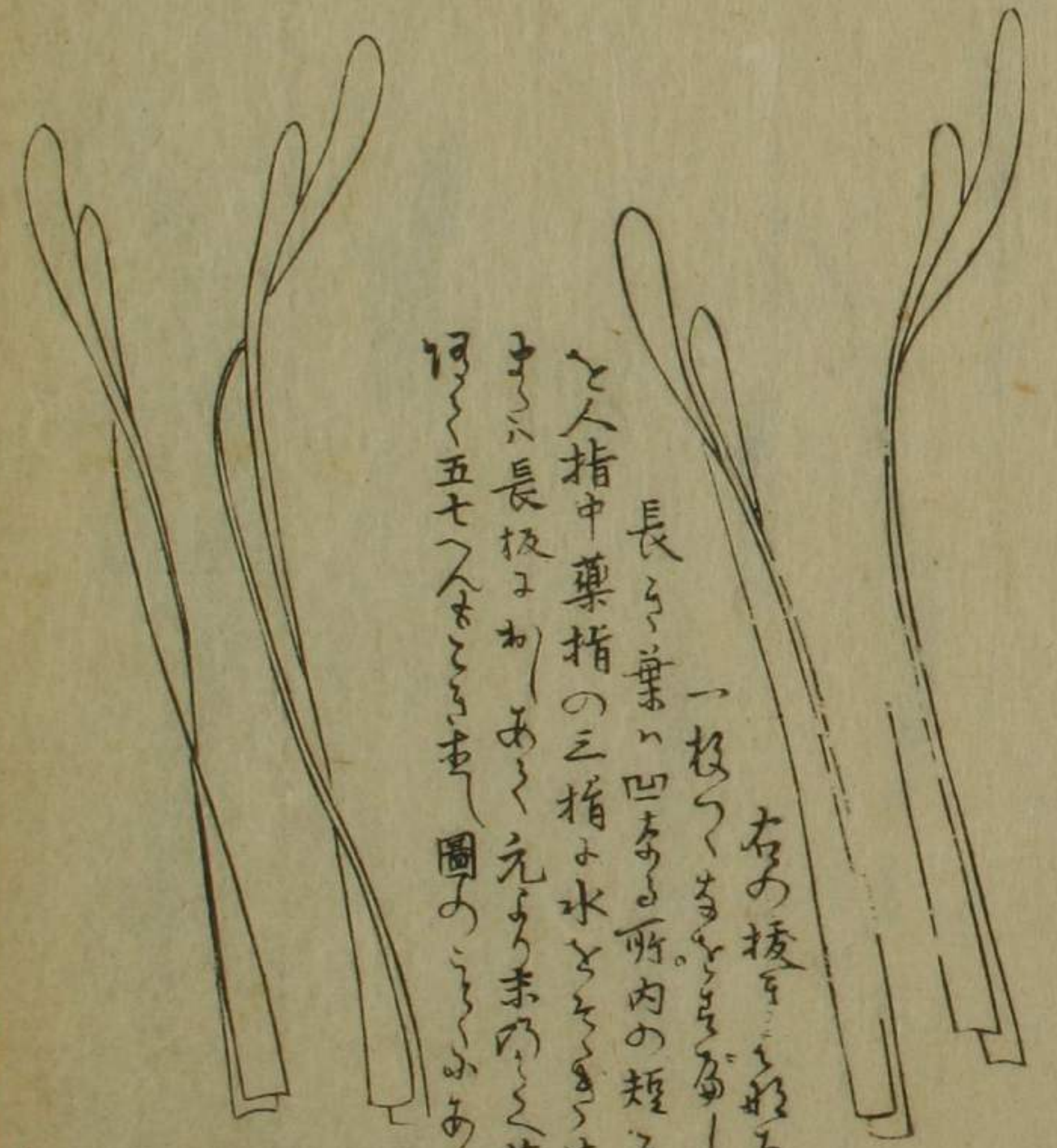
夏の小菊
大凡



秋の
小菊
産の
汁

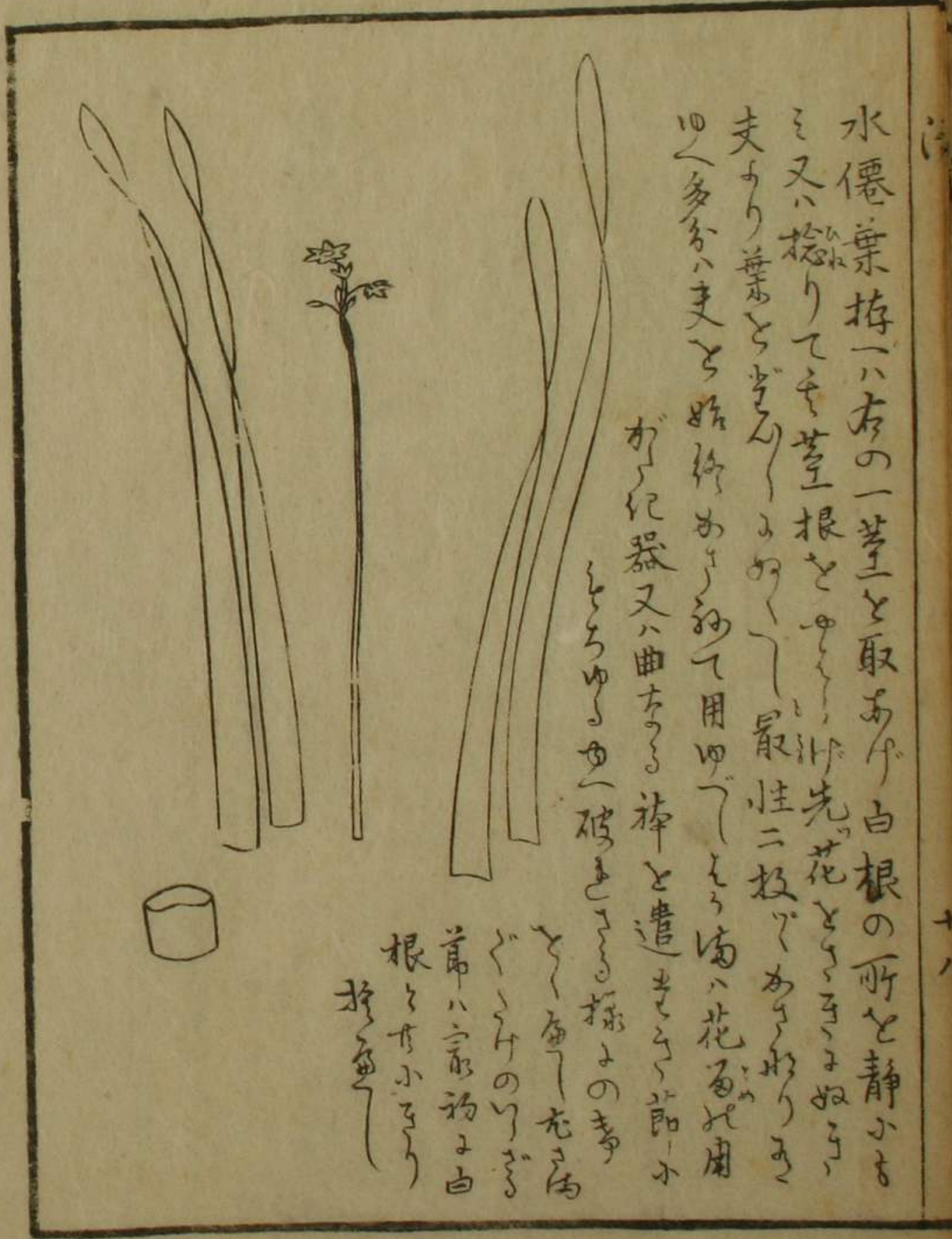


夏の
小菊
産の
てい



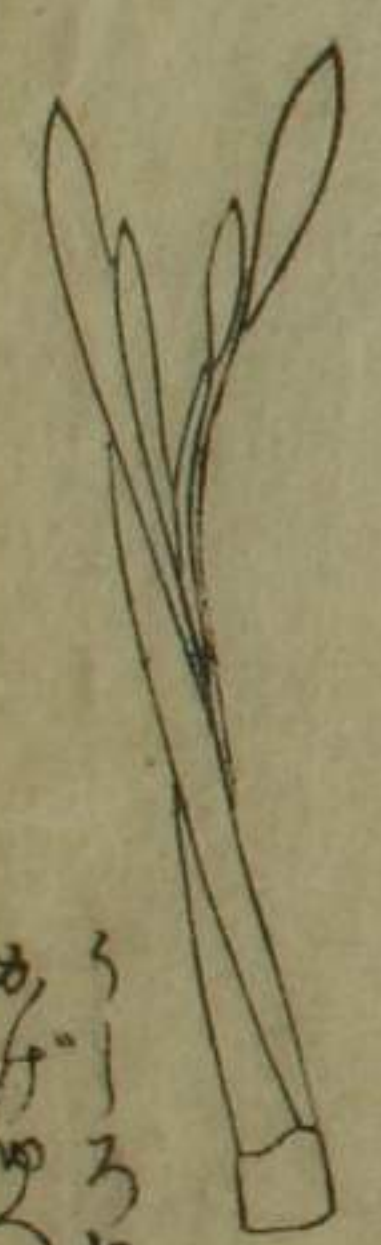
右の拔き... 長ら葉の四角の所の短... 一人指中葉指の三指... 長さ五七... 図の... 葉も

青色の... 起一掃口傳多



水僊葉... 根と静小... 夫の葉と... 四人多... かり器又... 破... 根と静小

根と静小... 於

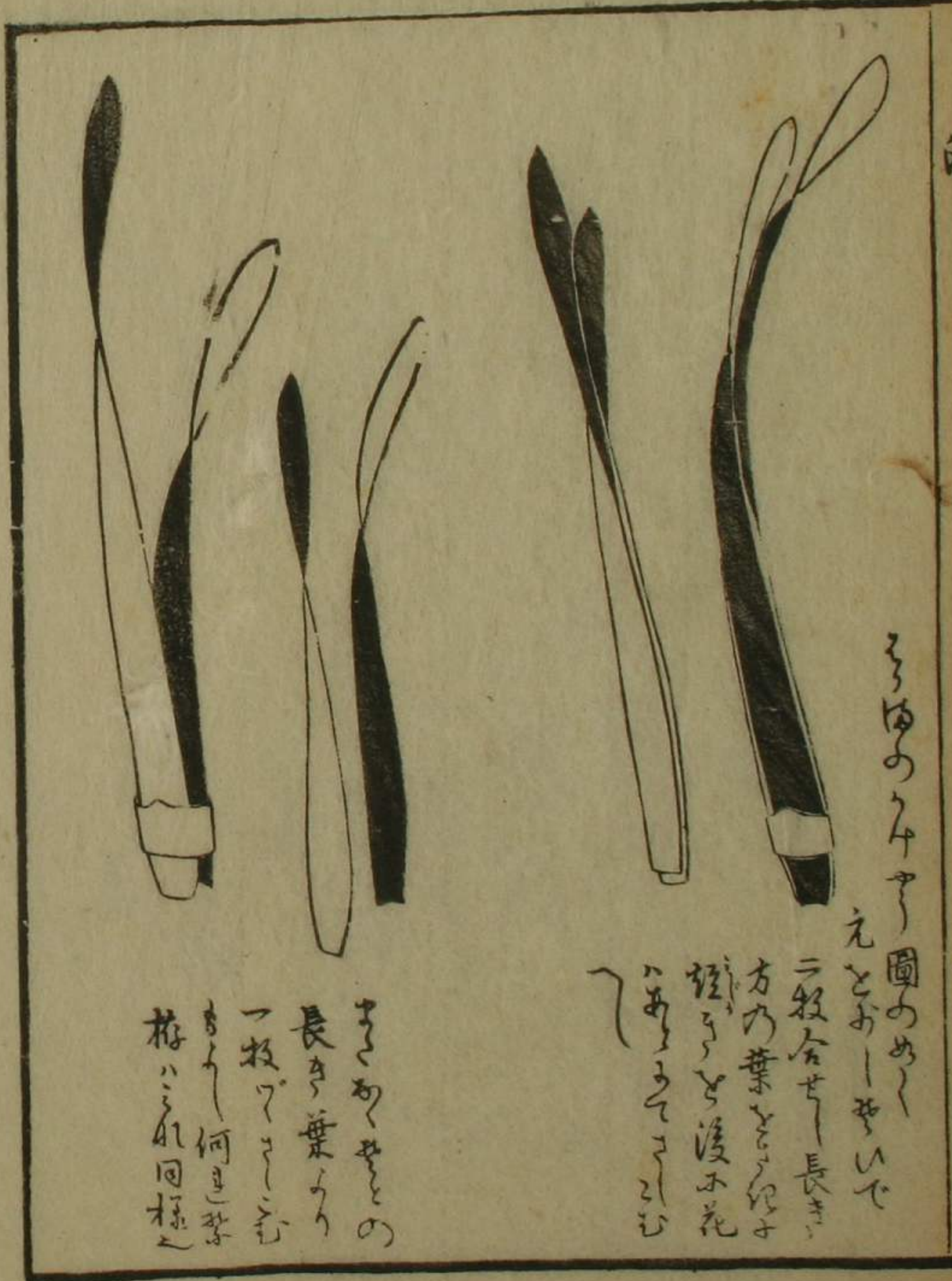


うしろ梅子枝ハ
あがゆめり
しめり
後とん

斯二色なる下を
茎形残



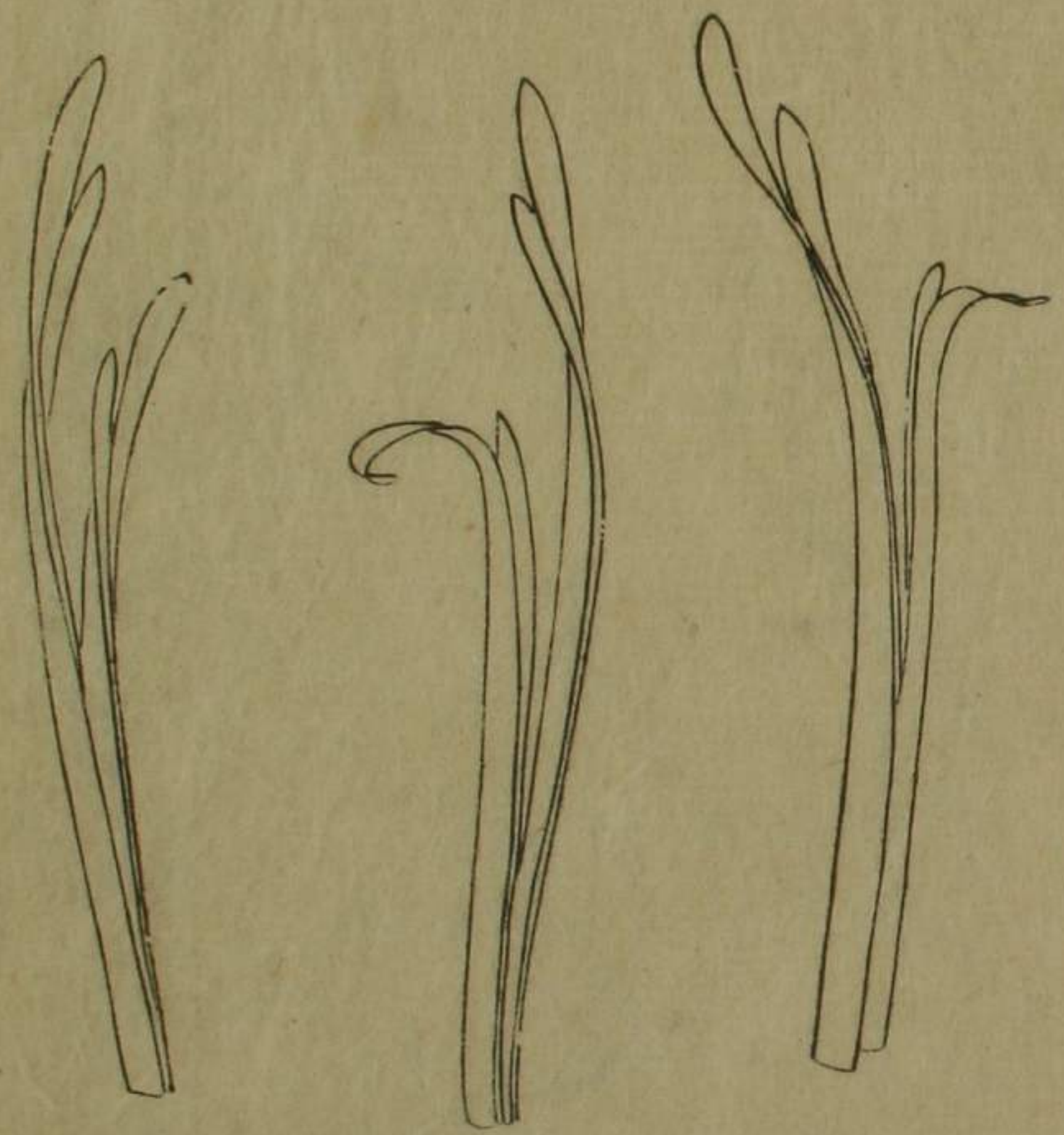
葉梅ハ如是ひとれと
最上とるなり



ろゆのふや
元とあーやいで

三般合せー長き
方の葉と
花
ハあーとる

まてやの
長き葉
一枚
梅ハこれ同様



水仙必葉をくせ
 ありて一採りあ
 らざる物之有る
 其の葉但とも
 左りまを冠し左
 りと心右一ま
 志り因て左り
 勝手心は葉但
 と二三茎に交り
 出さ下ふ用ゆ葉
 才此意して描く
 原し先言の坊
 圖のの 尚次
 見る 別体注
 表に多し

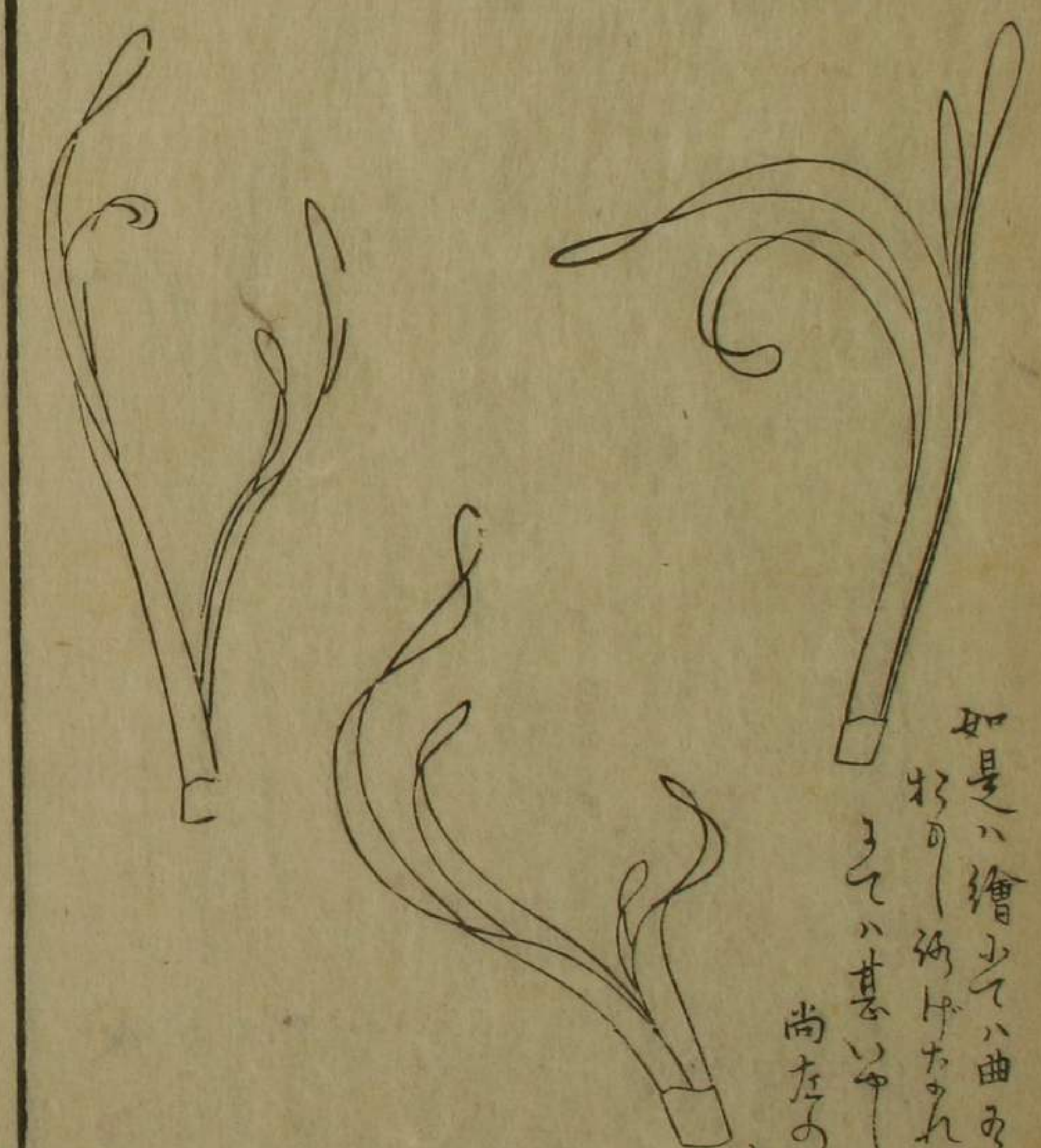


水仙はくちよ
 け縄の採りよん
 とる重くく
 せん合へし

茎葉亦ふかく
 乃通ふつく
 あり



水僊曲葉梅荒増如是懸瓶
置瓶添之物前 居い前
後 左右時宜不應一見斗以用四



如是ハ繪少ハ曲ありて
打可ハ何ハたれども実茎
よてハ甚い中一用四一以
尚左の車一撮一
うささ
うささ

盡信書不如無書と孟子此言辭宜たより有也本草の
學行きてより一葉一花其名審らるるハ形然とい
とも變化の道止むされ其説も又止彼者理と解證と
述つて其名も亦一定さるる物あり何まは是何れとい
書小なりと惑つるのそ在り其處説を取らまは是といひ
是ともそ是とも不同名異物一種兩名の傳ふ倭漢藥品方言
乃中と僅小爾ふまは得まは二三名と揚け及の卷花
瓶の邊に誌し聊此集を教ふ人の便小備ふ見る人不足と
補ひ違つると改えまはるる幸ひ形も者乎

